

開催地名	埼玉県杉戸町
開催日時	令和7年8月23日(土) 10:30～12:00
開催場所	彩の国いきいきセンターすぎとピア
語り部	稲田 浩一(鳥取県米子市)
参加者	杉戸町長、危機管理課課長、自主防災組織他 100名
開催経緯	近年の自然災害や令和7年7月10日の記録的大雨情報を背景に、地域の危機管理意識を高める必要性が認識されている。大規模地震などの発生も想定される中、地域防災力の強化が不可欠である。
内容	<p>(1) 自主防災会発足のきっかけ</p> <p>平成25年に同じ自治会内で発生した火災を契機に、近隣住民同士の「助け合い」の必要性が強く意識されるようになった。火災は金曜日の昼間に起こり、自分は仕事に出ていたため不在であり、家にいたのは高齢の両親だけであった。父は難病を患い要介護の状態であり、介護を担う母は父を連れて逃げるができなかった。母が体験した恐怖は深刻であり、これをきっかけに「近隣同士で心配し合い、助け合うことが必要である」と強く感じるに至った。こうした思いから地域を「皆の命が守れる自治会」にしたいという意識が芽生えた。</p> <p>その後、自治会内の女性たちが中心となり、看護師や介護士の協力も得ながら「ふれあいサロン」と呼ばれる高齢者の交流の場を立ち上げた。このサロンは月に一度開催され、高齢者同士が顔を合わせ交流を深める場であった。交流を通じて孤立を防ぐとともに住民同士のつながりを育むものであり、やがてこのサロンが防災活動の母体となった。これにより高齢者や障がい者も参加しやすい環境が整い、地域全体での防災意識の高まりにつながっていった。</p> <p>(2) 活動のスタートと拡大</p> <p>平成31年、当時は自治会長が自主防災会会長を兼務していたため、多忙で防災活動にまで手が回らない状況であった。そのため自主防災会会長の兼務を解き、独立した体制を立ち上げたいと考えるようになった。そこで自分と同じ意見を持っていたもう1人の仲間と二人で話し合いを重ね、まずは当時の自治会役員に対して防災会体制の立ち上げを提案した。しかし、予想していたとおりに許可を得ることはできず、理解を得ることに大変な苦労を要した。</p> <p>それでも「災害時に高齢者、障がい者、子供たちを守れる自治会を作りたい」という思いを強く訴え、時間をかけて粘り強く交渉を続けた。その結果、徐々にではあるが賛同者が現れ協力してくれる人々が少しずつ増えていった。やがて若手やその家族も活動に加わり、防災活動は次第に広がりを見せるようになった。</p> <p>こうして毎年の防災訓練を継続して行うことができる体制が整い、準備段階から地域全体を巻き込む活動へと発展していった。活動の根底には「無理なく・楽しく・笑顔</p>

で」をモットーとする考え方があり、遠足や交流会といった地域行事の中に防災研修を組み合わせる工夫が取り入れられている。このような工夫により、防災活動が単なる義務的な取り組みではなく、住民にとって自然で楽しい活動として浸透していったのである。

(3) 現在までの防災活動

地域全体の防災レベルを揃えることを目指し、まだ活動を始めていない地域には、経験のある自分たちが一緒に入り活動のスタートを支援している。単独での取り組みよりも合同で行う方が費用面でも有利であることから、合同防災フェスティバルを開催してきた。消防機関の協力を得ることで負担も軽減され、消防士が参加することで子どもたちの憧れを集め、家族連れの参加にもつながっている。

また、打ち合わせを行わずに初対面の住民同士で活動を行った際、災害時と同様に初めて顔を合わせる状況でも、指導する側と学ぶ側がすぐに協力できることを確認することができた。消防署が提供した消火器訓練では参加者全員が体験し、防災意識の向上につながった。

住民の気持ちとして大切にしている事は「安心・安全・安価」の三つである。これに応えるため、女性スタッフを増やし生活の気づきや避難所生活への不安を軽減する工夫を行っている。加えて防災にかける費用については全員が同意しているわけではないため、自治会費と防災費を分け、自治会費 400 円、防災費 100 円と区分して会計管理を行っている。

自主防災組織の体制はあえて役職を三役にとどめている。これは昼間の災害発生を想定し、役職を決めていても仕事で不在の場合が多いからである。働いている人は勤務先に駆けつけざるを得ないこともあるため、在宅者でどう対応できるかを第一に考えている。

具体的な取り組みとしては、安否確認シートを導入している。防災会長が 1 軒ごとに確認し、それを各班長がまとめることで災害時の状況を迅速に把握できる体制を整えている。また、同世代の交流から始まり多世代交流へと活動を広げ、運動会、遠足、クリスマス会などを実施している。こうした活動を通じて住民同士の交流を深めるとともに防災力を底上げしている。

女性主導のサロン活動が基盤となり、住民間のコミュニケーションが防災力の核となっている。小規模な助け合いの積み重ねが大規模災害への備えにつながっているのである。

この活動を継続していくために、次の点を心掛けている

- ・活動は無理なく行う

- ・若手を呼びこむ
- ・組織の三役は同じことを繰り返さず、一人が代表して発言し全体の様子を伺う
(内容は三役で共有済み)

(4) まとめ

住民同士の小規模な助け合いの積み重ねが、大規模災害への備えにつながる。行政任せにせず「自分たちの命は自分たちで守る」という意識を共有し、支え合いで乗り越えることを重視している。主題である「笑顔の絶えない楽しい防災活動 ～誰一人残さない防災～」を実践することが持続可能な地域防災力の強化につながっている。



開催地より

自主防災組織の運営について、役員の構成や行事の詳細など、参加した町民の、特に自主防災会代表者にとっては、とても参考になったのではないかと考えている。町職員にとっても、自主防災会に対するサポートの仕方を改めて考える良い機会であったと考えている。